

POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
第 52 号 2003.3.25

発行
北海道ポーランド文化協会
〒 069-0851
江別市大麻園町 28-18
小笠原正明
電話 011-386-3405
FAX 011-387-9016



ホストファミリーも大切な家族

リレーエッセイ

「恋のお相手は・・・」

菊地 多美絵

初めて「ポーランド」という国を意識してから八年、ワルシャワ初訪問から五年、ポーランド再訪の夢が叶って、二〇〇〇年七月からの二年間をバルト海沿岸の港町・グダンスクで過ごしました。

到着後一週間はワルシャワのホテルに滞在しました。新しい生活と不自由な言葉、緊張の毎日の密かな楽しみは、近所の市場巡りでした。生まれて初めて山積みのベリー類を見たときの衝撃は忘れられません。鮮やかな赤や青色を見ているだけでワクワクして元気になりました。その後も、ベリー類が店頭を飾るようにになると「ああ、夏が来たなあ」と感じたものです。

街中でよく見かけた看板がありました。私と友人が分かる単語は「若鶏」のみ。続きを辞書で調べると「焼き串」となっています。これはもしかして焼き鳥…？と早速、近所

のスーパーに駆け込みました。期待に胸を膨らます私達の前に現れたのは、鉄棒に刺さってグルグル回転する鶏の丸焼き。ちよっとイメージとは違いましたが、おいしく頂きました。

ウツジでの語学研修中はホームステイをし、「三女」として可愛がってもらいました。ホストマザーは来日経験もあるほどの親日家で、毎晩、「アイヌ文化について」「磯れとは」など日本語でも難しい事柄について質問され、つたないポーランド語でしどろもどろになりながら説明したのも良い思い出です。

週末は郊外の家庭菜園に出掛け、草むしりや野菜取りのお手伝いをしました。「これはプラム、これはいんげん」と名前を教えてもらい、仕事一段落したらお茶とお菓子で休憩。これこそが本当の『ゆとり』だと思いつつ、どれだけのポーランド



人がこういう生活を享受出来るのか
考えさせられました。

そんな楽しい生活に別れを告げ、
やってきたのがグダンスク。覚悟の
上とは言え、今までとはまた違う環
境に戸惑いを感じ、仕事に行き詰
まって帰国を考えたこともありまし



カシューブ地方の民族舞踊団と。カシューブ
独特の柄は使われている色それぞれに意味があるそうです。

たが、徐々に友人が増え行動範囲が
広がるに従って、グダンスクが自分
の街だと感じるようになりました。
特に好きだったのが旧市街の風景。
どんなに楽しい旅行に出掛けても、
帰りの電車の窓から旧市庁舎や聖母

マリア大聖堂の尖塔が見えてくると
ホッとしましたものです。

言葉には最後まで苦労しました。
最初の半年ほど、駅では日付と行き
先を書いた紙を見せて切符を購入し
ていましたし、品物を指名しなくて
はならない小売店には怖くて入れま
せんでした。いつまでも避けている
訳にもいかなないので勇気を振り絞っ
て使っているうちに舌が慣れました
が、辛抱強く注文を聞いてくれた近
所の駅員・店員さん達には心から感
謝しています。

買い物と言えば、全ての商品がキ
ログラム表示なのにも困りました。
日本ではパック売りがほとんどで、
一人分のハムが何百グラムかなんて

気にしたこともありませんでしたか
ら。「ベーコン(ポチェック)」と

「コウノトリ(ボチヤン)」が似た
音なので、ポーランド人はコウノト
リを食べるのかと驚いた話は、友人
お気に入りの笑い話となりました。

ポーランドのために一肌脱ごう!
と意気込んで出発したはずが、色々
な人に支えられ、私が育ててもらっ
た2年間でした。EU加盟に向けて
変動しているポーランドを生で感じ
られたのも貴重な経験でした。第二
の故郷・ポーランドを好きになれば
なるほど溶け込めない外国人の自分
を感じ、今は切ない片思いですが、
いつかこの想いが届くことを願って
います。

ポーランド文化協会

設立15周年を祝って

灰谷 慶三



昨年十月で北海道ポーランド文化
協会は設立十五周年を迎えました。

昨春秋に開催された総会におい
て、初代の今村成和会長、第二代の

谷本一之会長に次いで、私が第三代
の会長に選ばれました。本来であれ
ば、私などよりはるかに適任の方も
おられたのですが、御病気のためお
引き受けただけませんでした。協
会設立の最初から関わっていた者の
ひとりとして十五周年を迎える協会
の発展のために責任があると考え、
非力ながら会長をお引き受け致しま
した。

当協会は、「北海道ポーランド文
化協会」という名称からも、また、
会則に謳われている目的からも、
ポーランドの文化に親しみ、それを
多くの人々に紹介することに活動の
主眼があります。しかし、文化と
言ってもその中味はまことに広く多
岐にわたっておりますから、そのす
べてを取り上げるのは不可能であり
ます。その点から申しますと、私た
ちの活動分野は今後も、従来からの
例会を通しての音楽、文学、絵画、
映画、ポーランド語、料理、フォ
ークダンスなどが中心になるものと思
います。問題は、こうした活動を通
してどれだけたくさんの方に御参加
いただけるかという点ですが、昨年
試みた道立近代美術館でのピアノ・
ロビーコンサートは大変な盛況で、
大勢の聴衆を集めることができ、大
成功でした。二〇〇三年の活動にお

いても、こうした試みの方向を積極的に進めていきたいものです。

また、ポーランドは映画大国でもあり、私たちの協会では、九六年に急逝した名匠クシシュトフ・キエシロフスキ監督の作品「アマチュア」、「トリコロール・青の愛」などの鑑賞会を例会として行ってきましたが、今、東京渋谷では、この名監督を偲んで、「キエシロフスキ・コレクション」と銘打って上映会が開かれております（四月十八日まで）。私たちの活動は、これを先取りしていたわけで、これからもポーランド映画の名作を紹介していきたいと思えます。さらにまた、現在、東京府中市の美術館で、「シヨパン展」が開催されており（四月十三日

まで）、シヨパンが使用したのと同じ型のピアノや自筆の楽譜が展示されておりますが、私どもも、以前に行いました、シヨパンの生涯と音楽を紹介、解説する会を再び開催したいと思っております。

すでに述べましたが、今年は協会設立十五周年に当たります。これを記念して、当協会の会誌「ポーレ」の編集編を記念誌として出版しようという企画を現在進めているところです。秋の総会までには是非出版にこぎつけたいと思えます。

最後に、これからの活動に会員皆様の積極的な御協力をお願いする次第です。

ハリーナ・チエルニー・

ステファンスカ先生を悼んで

遠藤 郁子

「北海道まざるか」の前身「まざるか」の名誉会長、ハリーナ・チエ

ルニー・ステファンスカ先生が今年七月一日朝一時、ポーランド・クラ

クフの自宅で胃癌のため亡くなられた。享年七十八才。亡くなる二カ月前まで過密なスケジュールをこなされ、もうこの世に思い残すことは何もない。やるべきことは全て成したとの言葉を残されての大往生だった。

先生との会話の中で「まざるか」とシヨパンのマズルカが混同され、笑いになったことも度たびあったが、「まざるか」の当初からの大きな柱であったハンデイキヤップを背負った方や、才能ある若い音楽家を支援するという目的に、私で役にたればと名誉会長を快諾してくだ



写真中央がステファンスカ先生

さったのだった。「まざるか」がNPO法人「まざるか北海道」として再出発し、内閣府の管轄になったときも「ブラボー」と喜んでくださった。亡くなられる三ヶ月前のことだったのに……。

ハリーナ・チエルニー・ステファンスカ。ポーランドが世界に誇るピアニスト。戦後の第一回シヨパンコンクール優勝者。シヨパンの作品、特にお国の民族舞踊、マズルカやポロネーズを弾いたら右に並ぶものなし、指揮者のシオルテイやメータとベルリン・フィルなどとの共演文化親善大使の称号で世界中を飛びまわった彼女は、一九二二年生まれ。教則本ツェルニーを祖先に持ち、六才でモーツアルトのピアノ協奏曲をクラクフ・フィルと協演しデビュー、以来、「神童」の名が広まったが、十二才頃には既にリストの超絶技巧エチュード全曲をなんの苦もなく弾いていたという。しかしその後の一番大切な時期を、ナチス・ヒトラーの占領で中断され、以後五年間ピアノにふれることができなかつた。シヨパンを弾いていることが知れば処刑された。「何もすることがなかつたから、結婚して子供を産んだ」とふりかえって先生は屈託なく笑っていたが、心中は

察せられる。

そんな空白の後に開かれた戦後第一回目のコンクールのときは二十五才になっていた。

第七回シヨパンコンクール（一九六五年）に私が参加して以来、ステファンスカ御一家とは、家族のような御縁がずっと続いている。第二の母でありピアノの師であり、人生の師であり、音楽の同志だった。内弟子として住んだクラクフの家で、私は古き良きポーランドの誇り、気高さ、凛としたものを日々の生活で学んだ。

六月に入つて、チェンバリストである令嬢から「母が危篤で数時間後に逝くかもしれない」と国際電話が入った。目を閉じて静かに私の氣を送ると、すぐに逝くようなお体でないことがわかった。以来毎日、遠く離れたクラクフへ氣を送り続けたが、ある日から氣が先生の体に入つてゆかなくなつた。その頃、先生は水も受け付けなくなつて御自宅のベッドでの点滴の針さえ自分で抜かれるようになり、体重も三十キロを切っていた。

「司祭が招かれ、今までの罪の懺悔をした後は、顔のしわも、しみも全て消えて、二十才台の母の顔に戻りました。とても病人とは思えなかつ

た。それどころか透き通つた人間離れした神の顔のようになって・・・亡くなる前日まで、ベッドに横たわつて、コンサートを控えた生徒の最後のレッスンをしていました。そしておまえを残してゆくのは悲しいけれど、もうおまえは全てを心得ている。心配せずに生きなさい、と言つて昏睡状態に入りまして・・・」。

先生が昏睡状態にあつた頃、私は東京の紀尾井ホールで「序破急幻再

び」という自主リサイタルを開いていた。私が乳癌から再起して十年が経つた記念リサイタルであり、「この会が済んだら飛んでゆきます」。あの晩は「今日の遠藤さんはどうしたんでしょう。いつもと全然テンポもタツチも違います」と言われるほど別の演奏になった。リサイタルが終わりに近づいたときに、ステージに白い煙が立ち、やがて美しい金色になり、ゆっくり神界へ昇つていったのを、数人の友人知人たちが

見ていた。ある人は「ライティングですか?」と言ひ、ある人は「空調の煙?」と言ひ、ある人はさらにハッキリと「美しい女性が金色に包まれて昇つてゆくを見た」と言つた。

深夜に帰宅し、「疲れたからポーランド語が出てこない。明朝クラクフへ電話を」と就寝。そして翌朝クラクフからの電話で、「今母が逝きました。朝一時です」と訃報が入つたのだった・・・。

先生の悔いのない人生のことばどおり、日本からの持参のお線香の煙が、風のある日なのにまっすぐクラクフの空へ昇つていった・・・。

十一月十二日、札幌のキタラ小ホールにてハリーナ・チェルニー・ステファンスカ追悼演奏会が行われた。

当日のステージは、あたかもそこにステファンスカさんが在るかのような不思議な輝きを放っていた。ステージ正面には遺影が飾られ、その下に真っ白い花が配されて、そのさまは、まるで白い煙が天に昇っていくかのようにであった。田中克己氏が午前中かかって作り上げたと聞く。

（月刊「シヨパン」より転載）



札幌・キタラ小ホールでの追悼演奏会

シヨパンの「名の日」

三浦 洋

す。

師に自筆譜を献呈

ポーランドにいた頃のシヨパンが、「フリデリク」の名の日である三月五日にお祝いしていたことは、いろいろな資料からうかがえます。例えば十七歳のシヨパンは、親友のヤン・ピヤウオブウオツキにこんな手紙を書いたことがありました。

「親愛なるヤン！ 君は生きているのか、いないのか。ああ神様、君が僕に便りをくれなくなつてからもう三か月にもなる。君から手紙をもらわないでいるうちに、僕の尊い名の日が過ぎてしまった……」（一八二七年三月十四日付）

当時、ヤンは結核を患い、シヤアルニヤ地方の郷里ソコウオヴォに帰つて療養中でした。もはやシヨパンの名の日にお祝いを書いて送れないほど、病状が悪化していたにちがいありません。この年の暮れか、翌年始めにヤンは亡くなつたよう

です。シヨパンが家族や友人と交わした手紙を見ると、祝いのメッセージを送る「名の日」が、定期的な音信のきっかけになつていたように思われます。祝うという点だけなら誕生日と変わりませんが、「名の日」はカレンダーに記されているほど公的であり、市民生活の一部になつていきます。誕生日が生物学的な自分の日であるのに対し、「名の日」は文化的な自分の日であるといえるでしょう。裸で自然世界に生まれた人間が、名前を与えられることによつて歴史的世界に錨を下ろし、しっかりとつながれるわけです。

また、「名の日」が人間関係において果たす祝賀の役割を見ると、日本の暦の「大安」に似ていなくもありません。例えばシヨパンが、一番最初の師ジヴニーに「ポロネーズ

イ長調」の自筆譜を献呈したのは一八二一年四月二十三日。これは、ジヴニーの名ヴォイチェフの名の日です。いわば「よき日」を選んで献呈したわけですが、結果的に師弟の「別れの日」になりました。というのも、ジヴニーはこのポロネーズからシヨパンの成長を悟り、もはや先生としての役割を終えたと考えたからです。もつとも、シヨパン自身が「ポロネーズ第一番」と名づける曲を作つたのは十五年も先のことで

す。もう一つ、シヨパンの手紙の中に「聖人の日」として登場するのが、ミハウの日である九月二十九日。まもなくポーランドを発つことになつていたシヨパンが、寂しい思いを親友のテイトウス・ヴォイチェホフスキに打ち明けた手紙です。

「ぼくはまだワルシヤワにいる。ぼくには、出発の日を決める力がなまうことになるような気がする。死に行くような気がする……でもきつと、聖ミハウ祭までにはぼくの宝物すべてと別れ、ウィーンにいることだろう」（一八三〇年九月）

しかしシヨパンが実際に出発した

のは十一月でした。この手紙の中には出てくる「宝物」という言葉は、十字架教会のシヨパン柱に掲げられている「宝のあるところ」に心もあつたという新約聖書マタイ福音書の一節と不思議に呼応しています。

さらに、パリでシヨパンと交流した人物の中で、名の日に関するエピソードを持つのが詩人のボフダン・ザレスキです。ザレスキは二月六日を名の日としていたようで、それにちなみ、一八四四年二月二日にシヨパンはザレスキの前でピアノを演奏して聴かせました。ザレスキの日記によると、曲目はシヨパンのプレリユード、マズルカ、ポロネーズなどです。そして最後に、今ではポーランド国歌となつた「ポーランドはいまだ滅びず」（作者不詳）を弾いたそうです。

それから二年後の三月五日、今度はシヨパンの名の日にはザレスキが祝いのメッセージを送りました。

「レッスンの邪魔をしようとは思いません。でも、君の名の日ですから、私の一番あたたかい祝福を送らせてください。……願わくば次の機会には、独立した自由なポーランドでこれを告げたいものです。クラクフで事はとてうまく進んでいま

す

ここで書かれている「クラクフの事」とは、一八四六年二月に起こったクラクフ蜂起を指しています。クラクフ周辺の農民らが、オーストリア支配に対して起こした反乱です。分割されたポーランドの独立回復につながりうる動きとして、ヨーロッパの革命家たちが注目した蜂起でした。当時、ザレスキはシヨパンにとって、祖国の政治運動の様子を語ってくれる数少ない知人の一人です



ボフダン・ザレスキの肖像画

した。シヨパンの名の日を祝う形をとりながら、ポーランド情勢を知らせる手紙でもあったわけです。クラクフのことがぼんやりとしか述べられていないのは、検閲を恐れたのかもかもしれません。当時のフランス政府は保守化を強め、それが反体制運動を惹起して二年後に二月革命が起こります。

ちなみにザレスキは、シヨパンからピアノを習っていたゾフィア・ローゼンガルトと結婚しました。一八四六年十二月二十八日の結婚式にシヨパンは証人となって立ち会い、自作の「主よ、来りませ」という曲を演奏したそうですが、残念ながらその楽譜は残っていません。また、シヨパンの歌曲のうち一八四〇年代に作られたものは、ほとんどがザレスキの詩をもとにしています。この事実は、二人の交流の深まりを表しています。

Xマス・イブのアダム

このザレスキと一緒に、一八三二年七月三十一日、パリに到着したのがポーランド最大の文学者アダム・ミツキエヴィチ。ワルシャワにいた頃から親交があったザレスキとは違い、ミツキエヴィチはシヨパンとパリで初めて顔を合わせました。

さて、そのアダム・ミツキエヴィチの名の日は十二月二十四日。つまりクリスマスイブですが、この日はミツキエヴィチの誕生日でもありません。誕生日と名の日が同一日なのは、おそらく十二月二十四日生誕にちなんで、その日の聖人アダムの名が与えられたからでしょう。ミツキエヴィチの両親の信仰の深さを想像さ

せませす。

アダムといえば、かつてシヨパンコンクールで優勝したアダム・ハラシエヴィチというポーランドのピアニストがいます。彼も十二月二十四日にお祝いしているのでしょうか。

ピアノコンサート

二百人を超す盛況

昨年九月二十八日、北海道立近代美術館ロビーにて、同美術館との共催

による、ピアノコンサートが開かれました。このコンサートは、今後北海道ポーランド文化協会の例会の一つとして、毎年一回恒例で開催される予定です。その記念すべき第一回のコンサートだったわけですが、用意されていたイスは午後三時の開演前から満席になり、イスの周りにびっしりと立ったまま聞いて下さったお客さまも含めて、約二一〇名が、土曜日の午後、シヨパンにまつわるお話を交えたピアノコンサートを楽しみました。美術館のロビーは、もともとコンサート用につくられた空間ではありませんが、美しいシヨパンの音色が高い天井に澄んで響きわたり、素晴らしいものでし

た。今回はポーランド時代のシヨパンの作品ということで、シヨパンの幼少時から二十才までの限定された作品の中から、演奏者の方々それぞれに曲を選んで頂きましたが、普段あまりコンサートで聞く機会のない曲から、誰でも知っている曲まで、バラエティに富んだ十曲のプログラムとなりました。会場のお客さまは、立ち見の方も含めて、途中で席を立たれる方はほとんどなく、最後までコンサートを堪能下さり、大変嬉しいことでした。

コンサートの一歩初めと中間に、三浦洋さんによる、シヨパンや曲目に関するわかりやすい素敵な解説を頂きました。七十分のコンサートとなりました。次回のコンサートはいつですか？という問い合わせもいくつも頂き、今年度はまた新しい企画なども取り入れながら、秋に二回目を予定しています。いずれも素晴らしい演奏をして下さった四人の出演者の方々、また、様々なアイデアなど企画段階から御協力頂いたコンサート企画運営係の方々に、改めてお礼申し上げます。また次回のコンサートに関しても、会員の方々から広く、御意見や御希望、アイデアなど募集しております。どうぞお気軽に御提案下さい。

懐かしいバルシチの味



富山 信夫

ポーランド語教室のテキスト「標準ポーランド会話」を見ていたら……ロシア風のボルシチを想像して注文すると驚かされるのがバルシチで、これはビートでつくる真赤なスープで、ポーランド独特のもので……とあった。

一九九二年は真夏のこと、ワルシャワ旧市街のレストランで。カシヤさん「スープは何を？」と。「バルシチを」と私。出た！二十八年ぶり、赤紫のベタシアニン色のバルシチだ。四十年近くビート糖会社に勤めた私にとって、懐かしいビート独特の香りがするスープである。ピドゴシチでもバルシチとタルタルステーキ……ヤッセム博士曰く、これが一番のお薦めと。トルニでは鰻料理……アンナ博士曰く、暑

いので土用のウナギを……とやっぱりバルシチを。完成直後のオケンチエ新空港から発つ途中、どうしてももう一度、旧市街はあのレストランで、あのバルシチを賞味したくなつた。「カシヤさん、引き返す時間は？」「バルシチだけなら大丈夫！大急ぎ、タクシーで！」と。

その後、ポーランド留学生とよくこの話をする。休暇帰省から戻った彼・彼女達から、「お土産です。懐かしいポーランドの味を、富山さんにはこれが一番！」と、インスタントスープのバルシチ・チェルヴォニを。二十八年振りに味わったあのバルシチ、ポーランドの知人を懐かしみながら味わうこのバルシチ、このバルシチから次々と思ひ出しは始まる。



十月に行われた総会での記念撮影

事業計画と 新役員決まる

本年度の総会が二〇〇二年十月四日（金）午後六時三十分より、かでの2・7で行われました。

●総会

会長挨拶 会長 谷本一之

- 1 二〇〇一・二〇〇二年度事業
および決算報告、監査報告
- 2 二〇〇二・二〇〇三年度事業
計画（案）と予算（案）
- 3 二〇〇二・二〇〇三年度役員
（案）について
- 4 その他

（司会 本間富雄）

●懇親会

開会挨拶と乾杯

- 1 第四五回例会コンサート報告
- 2 大原昌宏先生とマズール先生
の話

会 食

閉会の挨拶

乾杯 — Sto lat

（司会 三浦 洋）

1 二〇〇一・二〇〇二年度の事業報告

①第四五回例会 九月二八日
 (土)北海道立近代美術館(参加者二一〇名)

②ポーレ発行 第五〇号(六月一日) 第五一号(九月十日) 計二回

③総会 二〇〇二年十月三十日
 (かざる2・7)

④運営委員会 二月六日、四月十七日

2 二〇〇一・二〇〇二年度の決算報告・監査報告

当協会の二〇〇一・二〇〇二年度の会計処理について監査を実施の報告

【下表のとおり】

3 二〇〇二・二〇〇三年度の事業計画および予算

①十五周年記念誌刊行

②ピアノコンサート

③ポーランド語講習会(希望により行う)

④その他

会誌ポーレ発行(二・三回)
 総会 二〇〇三年十月ごろ
 運営委員会 二回程度

4 二〇〇二・二〇〇三年度役員

(二年任期)について

(顧問)谷本一之

〈会長〉灰谷慶三
 〈副会長〉遠藤道子
 〈運営委員〉

安藤 厚 薄井豊美
 小笠原昭子 柏倉涼子

菊地多美絵 佐光伸一
 霜田千代磨 小林美保

中島 洋 本間富雄
 三浦 洋 渡辺 卓

〈ポーレ編集委員〉
 小笠原正明 小林美保
 佐光伸一 三浦 洋

〈監査委員〉富山信夫
 吉野悦雄

〈事務局長〉小笠原正明
 〈コンサート企画運営係〉

安藤むつみ 國谷聖香
 ウィリアムス美由紀

本田真紀子 小林美保

▼北海道ポーランド文化協会会則
 「第十一条 本会に顧問をおくこと

とができる。顧問は総会において選任され、」に基づき今年度より谷本氏が顧問に選任された。

5 その他

事務局について 左記の場所に事務局を変更する事になった。

069-0851 江別市大麻園町28-18
 小笠原正明

2001-02年度会計決算書

(自2001年10月1日～至2002年9月30日)

2002-03年度会計予算

(自2002年10月1日～至2003年9月30日)

【収入の部】	2001-02年度		内 訳	単 位:円	2002-03年度		内 訳
	予 算	決 算			前年度決算	予 算	
会 費	300,000	379,560	全額の80.5%、郵便振替払出料差引後		379,560	300,000	
その他	30	15,000	銀行利息、寄付		15,000	30	銀行利息
小 計	300,030	394,560			394,560	300,030	
繰越金	183,743	183,743			183,743	314,919	
合 計	483,773	578,303			578,303	614,949	
【支出の部】							
事業費	110,000	71,383	例会:60,000 総会:11,383		71,383	120,000	総会、例会等
連絡費	30,000	38,765	ポーレ発送、はがき・切手他		38,765	40,000	ポーレ発送2回、その他
編集費	40,000	22,200	ポーレ制作費、原稿料他		22,200	40,000	ポーレ制作費、原稿料他
15周年記念誌準備資金	50,000	0			0	150,000	郵送料他
会合費	20,000	21,889	運営委員会他		21,889	30,000	運営委員会他
事務費	100,000	109,147	人件費、事務用品		109,147	100,000	人件費、事務用品
予備費	133,773	0	封筒、書籍		0	134,949	
小 計	483,773	263,384			263,384	614,949	
繰越金	0	314,919	銀行預金:495 郵便局:305,120 現金:9,304		314,919	0	
合 計	483,773	578,303			578,303	614,949	

会費の納入はお済みですか？

(2002年10月～2003年9月分)

当会は、皆様からの年会費によって運営されています。
 上記の年度分の会費の納入を宜しくお願いいたします。

「ポーレ」編集委員会

小笠原正明・柏倉涼子

小林美保・佐光伸一

三浦 洋

☎ 011-386-3405

FAX 011-387-9016

〔連絡先〕小笠原

《会費振込銀行口座》

北洋銀行 大通支店

(普) 301-0605084

北海道ポーランド文化協会

事務局長小笠原正明

《郵便振替口座》

02740-5-19735

北海道ポーランド文化協会

普通会員(年額) 3,000円

維持会員(年額1口) 5,000円

POLE 第 52 号(2003.3.25)目次

菊地多美絵「恋のお相手は…」	1
灰谷慶三「ポーランド文化協会設立 15 周年を祝って」	2
遠藤郁子「ハリーナ・チェルニー・ステファンスカ先生を悼んで」	3
三浦洋「ショパンと名の日〈下〉」	5
ピアノコンサート(道立近代美術館、2002.9.28)報告～200 人を超す盛況	6
富山信夫「懐かしいバルシチの味」、第 16 回総会(2002.10.4)報告	7